

いろいろは



15

2004年6月20日発行

住所：台北市慶城街28號 通泰商業大樓 TEL：02-2713-8000 FAX：02-2713-0705
HP：http://www.koryu.or.jp/taipei/html/language/japan_lang.htm (日本語センター)
E-mail：nihongo@mail.japan-taipei.org.tw
発行：財団法人交流協会日本語センター
編集：堀越和男・頼雅婷 編印：加斌印刷有限公司

平成15年度

「台湾における日本語教育事情調査」報告

(財)交流協会日本語専門家 藤井彰二

(財)交流協会は、台湾における日本語教育事情を把握し、より効果的に日本語支援事業活動を展開していくために、これまで平成6年度、8年度、11年度に「台湾における日本語教育事情調査」を行ってまいりましたが、このたび、平成15年度の調査がまとまりましたので、ご報告いたします。

1. 概要

- 調査対象：①中等教育機関（中学校、普通高校、職業高校）
②高等教育機関（大学、専門学校）
③学校教育以外の機関（補習班、大学推定部、社区大学、公的機関、民間企業等の日本語講座）

調査期間：2003年11月1日～2004年2月29日

調査方法：調査票の郵送、ファクス、電話での聞き取り調査、訪問調査

- 調査項目：①機関（機関名、日本語教育の有無、日本語教育部門名、日本語教育部門代表者名、所在地、電話番号、ファクス番号、電子メールアドレス、ホームページURL）
②機関の性格（設置主体、教育段階）
③教師数（全体、専任、兼任、日本語母語話者）
④学習者数（全体、学位授与人数）
⑤日本語学習の目的（多岐選択式）
⑥日本語教育上の問題点（多岐選択式）

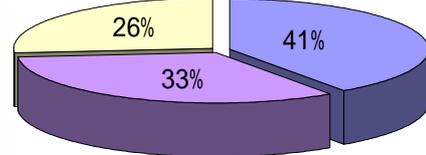
調査票の回収率：全体1,625機関中1,307機関(80.4%)、
中等教育1,196機関中1,043機関(87.2%)、
高等教育159機関中144機関(90.6%)
学校教育以外270機関中120機関(44.4%)

2. 機関数、教師数、学習者数

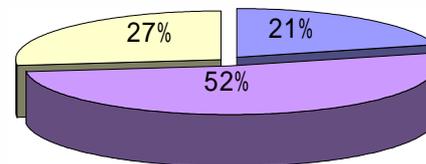
表1 教育段階別機関数、教師数、学習者数

	機関数(機関)	教師数(人)	学習者数(人)
中等教育	175	522	36,597
高等教育	145	1,304	75,242
学校教育以外	115	670	16,802
合計	435	2,496	128,641

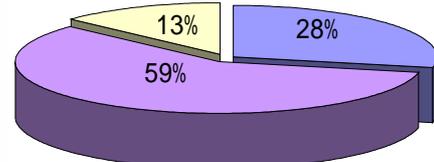
機関数



教師数



学習者数



■ 中等教育
■ 高等教育
■ 学校教育以外

図1 教育段階別機関数、教師数、学習者数比率

表1と図1から高等教育機関の教師数の比率が52%、学習者数の比率が59%で、ともに全体の半数以上を占めていることがわかる。中等教育機関は、機関数が全体の41%を占めるものの、教師数、学習者数の比率はそれぞれ21%、28%と少ない。学校教育以外の機関では、一人の教師が担当する日本語学習者数は平均25人と少ないが、中等教育機関では70人、高等教育機関では57人で、一人の教師が多くの学習者を担当している。

表2 機関数、教師数、学習者数の推移

調査年度	機関数(機関)	教師数(人)	学習者数(人)
8年度	342	1,198	161,872
11年度	694	1,742	192,645
15年度	435(▲37.3%)	2,496(43.4%)	128,641(▲33.3%)

※()は平成11年度調査との比較

表3 教育段階別推移

教育段階	機関数(機関)		
	11年度	15年度	増減率
中等教育	277	175	▲36.8%
高等教育	132	145	1.0%

教育段階	教師数(人)		
	11年度	15年度	増減率
中等教育	611	522	▲14.6%
高等教育	1,022	1,304	27.6%

教育段階	学習者数(人)		
	11年度	15年度	増減率
中等教育	57,029	36,597	▲35.8%
高等教育	73,505	75,242	2.4%

表2のように今回の調査を前回の平成11年度調査と比べると、機関数が37.3%、学習者数が33.3%、それぞれ減少している。しかし教師数は43.4%の増加である。機関数、学習者数が減ったのは、中等教育機関と学校教育以外の機関での減少による。

なお、今回の調査では、初めて補習班(語学学校)への調査も実施した。平成8年度、11年度の調査では、補

習班は調査票配布対象に含めなかった。平成11年度の場合、補習班については、台湾教育部統計処発行の『台湾地区各類型短期補習班概況統計調査報告(1998年)』の統計を採用し、機関数、学習者数に加算した。

表3によると、中等教育機関に関しては、前回の調査に比べ、機関数が36.8%、教師数14.6%、学習者数35.8%の減少となった。高等教育機関に関しては、機関数、学習者数は若干の増加であったが、教師数は、27.6%の増加を示した。なお、学校教育以外の機関については、前回と今回の調査方法が異なるため、比較しなかった。

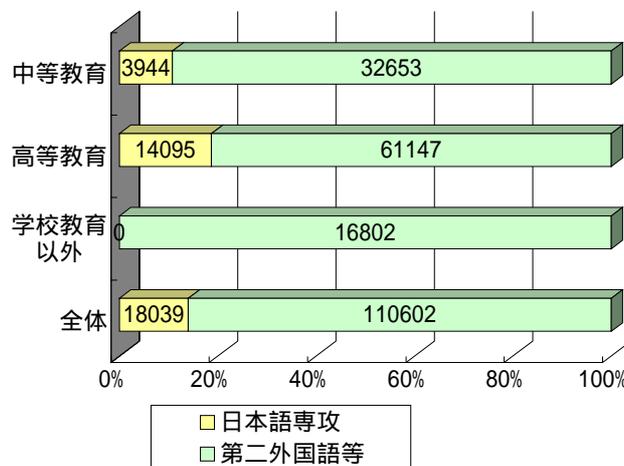
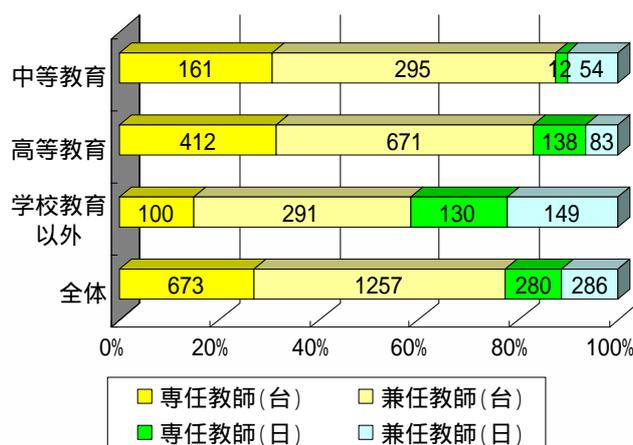


図2 教育段階別教師構成、学習者構成(人)

図2から、補習班など学校教育以外の機関では、日本語を母語とする教師の割合が41.6%で、中等教育機関の12.6%、高等教育機関の16.9%に比べ、かなり高いことがわかる。専任教師の全体に占める比率は、中等教育機関が33.1%、高等教育機関が42.2%、学校教育以外の機関が34.3%である。学習者の構成は、第二外国語等で日本語を学習する学習者の比率が全体の86%と大半を占めている。

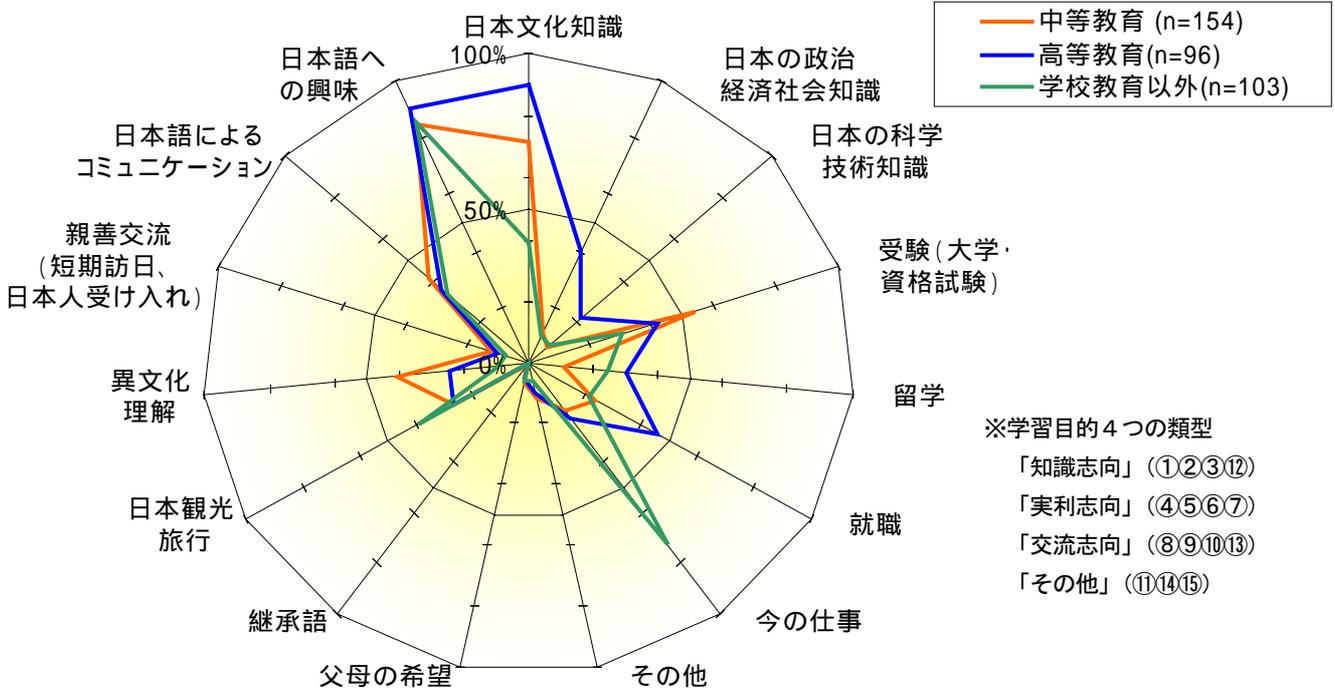


図3 教育段階別日本語学習の目的

3. 日本語学習目的

図3は「知識志向」(①②③⑫)「実利志向」(④⑤⑥⑦)、「交流志向」(⑧⑨⑩⑬)、および「その他」(⑪⑭⑮)の4つに類型化し、中等教育機関、高等教育機関、学校教育以外の機関に分けて比較したものである。

日本語学習の目的で、中等教育機関、高等教育機関、学校教育以外の機関に共通して上位を占めたのが、「日本語という言語そのものへの興味」「日本の文化に関する知識を得るため」である。高等教育機関では学習目的に「就職」「受験」「留学」といった実利的な目的が、学校教育以外の機関で学ぶ学習者の目的には、「今の仕事で必要」「観光旅行」など、具体的な目的もあがっている。

4. 日本語教育上の問題点

図4と表4では、「リソースに関する問題」(教材不足、日本文化情報不足、教材・教授法情報不足)「設備に関する問題」(設備不十分)、「学習者に関する問題」(学習者減少、学習者不熱心)、「教師に関する問題」(教師数不足、待遇不十分、日本語能力不十分、教授法不十分)、および「その他」の5つの類型に分けた。

中等、高等、学校教育以外の全機関が共通して日本語教育上の問題点として上位にあげているのが、リソース

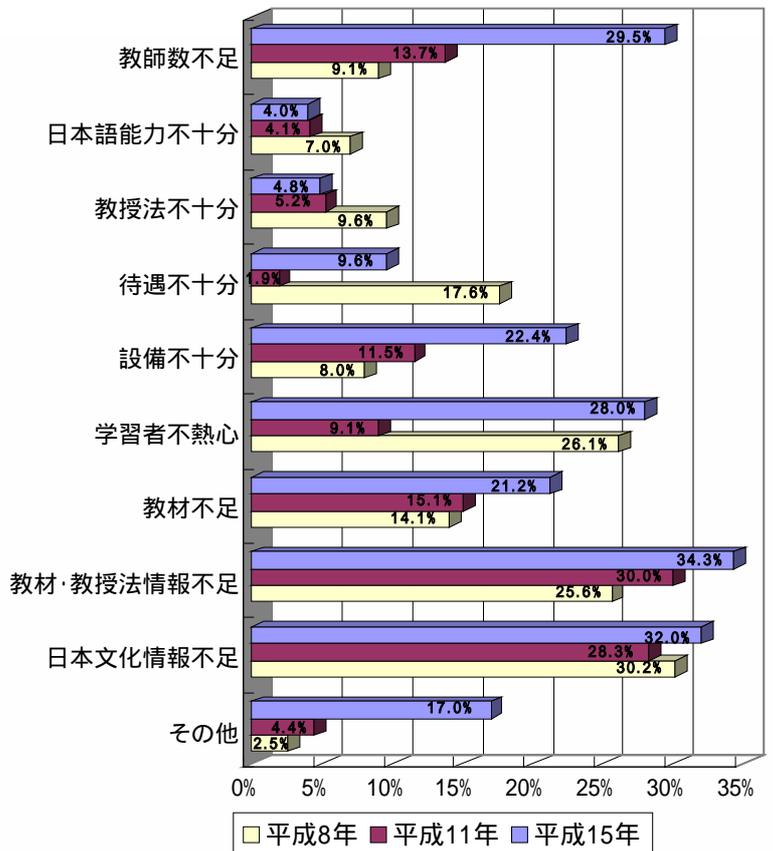


図4 日本語教育上の問題点 (調査年度別)

に関する問題に属する「日本文化情報の不足」「教材・教授法情報の不足」である。これは毎回、台湾での調査で上位を占める日本語教育上の問題点である。

中等教育機関と高等教育機関では、「学習者不熱心」「教師数不足」、中等教育機関と学校教育以外の機関では「学習者減少」が問題点として目立ったものであった。

表4 日本語教育上の問題点（教育段階別）（%）

問題点	中等教育	高等教育	学校教育以外
教材不足	22.7	15.6	24.3
日本文化情報不足	37.0	32.3	24.3
教材教授法情報不足	39.6	33.3	27.2
設備不十分	26.0	28.1	11.7
学習者減少	27.3	19.8	35.0
学習者不熱心	36.4	32.3	11.7
教師数不足	33.1	42.7	11.7
待遇不十分	12.3	4.2	10.7
日本語能力不十分	5.8	1.0	3.9
教授法不十分	2.6	8.3	4.9
その他	12.3	21.9	19.4

5. まとめ

以下、今回の日本語教育事情調査の主な特徴をまとめる。

1) 機関数、学習者数の減少

学習者数は平成8年度、平成11年度調査に比べ、大幅に減少した。減少の要因としていくつか考えられる。

- ①大学入試や台湾社会の英語重視に伴う日本語軽視。
- ②職業高校の総合高校化による日本語関連学科の廃止、日本語関連科目の減少。
- ③不景気のため、補習班等に通う経済的余裕がなくなった。
- ④学習手段が多様化し、機関に属さなくても放送番組、教材、雑誌等で独学できるため。
- ⑤今回の調査では、補習班に直接調査票を配布したが、前回までは教育部の統計データ（のべ学習者数）を採用したので、調査方法の違いで数字に開きが現れた。

2) 「言語」「文化」志向の強い学習目的

図3から明らかなように、学習者の日本語学習目的の中で、どの教育機関でも上位にあがっているのが、「日本語という言語そのものへの興味」「日本文化に関する知識を得るため」である。逆に「日本の政治経済社会知識」「日本の科学技術知識」を得ることを日本語学習の目的とする学習者は、比較的少ない。近年指摘のある台湾における社会科学分野での「日本研究」の不足は、日本語

学習者の関心が主に「言語」「文化」に向いていることと大きな関係を持つのもかもしれない。

3) 求められる教師の「質」

機関数、学習者数が大幅に減少する中で、教師数は1.4倍に増えた。これにより、教師ひとりが担当する学習者数が減り、学習環境が改善され、教師の負担も軽減された。しかしながら、中等教育機関、高等教育機関では、学習者の「学習意欲が高くない」ことが問題としてあがっている。このことは「教材・教授法等の情報不足」「日本文化情報の不足」といった他の問題と関係があるのかもしれない。学生たちは通常楽しくて活発な授業を求めている。それは教師の側からすると、教室活動の中で、学生にやる気を起こさせるような教授法を採用したり、最新の文化情報を提供したりということが求められることになるのであろう。

（財）交流協会では、ほぼ毎月のように日本語教師のための研修会を行っている。研修会では、教育現場で活用できるさまざまな方法や工夫が示され、教材・教授法等の情報不足を補うことができる。また日本語センターの閲覧室、及び高雄事務所図書室では、日本語教育関連の書籍や最新の雑誌が閲覧でき、貸し出しも行っているので、ぜひご利用いただきたい。

「教師数の不足」は、高等教育機関の一番大きな問題としてあがっているが、それは特に日本語関連の博士号学位を有する教師が不足していることと読みとれる。なぜなら、今回の調査で、高等教育機関では、教師数は前回調査に比べ、約1.3倍に増えているからである。

今回の調査のさらに詳しい内容や分析、台湾の日本語教育機関のリスト等については、近刊の『台湾における日本語教育事情調査報告書・平成15年度』および当協会日本語センターホームページをご参照ください。

今回の調査で各機関から寄せられた声は、日本語教育を行っていく上での問題点や課題を解決していくための貴重な意見となりました。この調査の報告が台湾や他の国・地域で日本語教育に携わっておられる方々のお役に立てることを願ってやみません。なお、この調査にあたって、多くの機関、方々からの協力をいただきました。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。



中等教育機関日本語教師研修会

第 22～24 回の中等教育機関日本語教師研修会が以下の日程で日本語センターにおいて行われた。

第 22 回は 4 月 10 日（土）、日本から阿部洋子氏（独立行政法人国際交流基金国際日本語センター専任講師）



を迎え、「海外の高校における日本語教育」についてお話いただいた。前半の講義では、中等教育機関で日本語教育が盛んに行われている諸外国（韓国、オーストラリア、中国、アメリカ、タイ、ニュージーランド、インドネシア）を取り上げ、これらの諸外国で共通の目標とされているコミュニケーション能力の向上、異文化理解能力の養成について注目し、文化理解を取り入れた言語学習の重要性を強調した。後半のグループワークでは、実際に文化理解を取り入れた教室活動をそれぞれの受講者が考えた。1 枚の写真からそれぞれ様々な教室活動が考え出され、受講者にとって楽しく新しい発見のある研修会となった。なお、高雄では文藻外語学院を会場に「第 2 回日本語教育実践講座」として、大学、高校、補習班等の教師、日本語教師を目指す大学院生ら 60 名余りが参加し行われた。

第 23 回は 5 月 15 日（土）、（財）交流協会高雄事務所の泉史生氏により「グループ活動を取り入れた教室活動ー様々な活動と発表形式を中心にー」と題し、前半は従来の「教師中心主義」の授業と、



泉専門家の提唱する「個中心主義」の授業内での教室活動の位置づけについての講演が行われた。「個中心主義」は、「学習者の自主性によって情報を自己操作しながら取り入れ、加工し、それを自己表出に結びつけること」と定義される。「個中心主義」での学習過程では、教師は学習者の学びたいこと、話したいこと、社会的スキーマや学習者が興味を持っていることを尊重し、そこから学習者の自己学習を引き出し、手助けする役割を意識する必要があると強調。後半では、泉専門家のこれまでの実践・活動例が紹介され、そのうちの一つ「名所案内」の活動をグループごとに行い、情報の加工を実体験した。この加工経験がそれぞれの教室活動に新しい視点をもたらす

と期待したい。

また、第 24 回は 6 月 12 日（土）に林明煌氏（国立嘉義大学助理教授）を迎え、「教育課程学から見た日本語教育のあり方」をテーマに行われた。はじめにカリキュラムとは何かといった



基本概念的説明から、カリキュラム開発上から見た台湾の中等教育機関における日本語教育の問題点を概観し、台湾の中等教育機関での日本語教育に最も効果的なカリキュラムを組むことの重要性を強調。さらに、学習ストラテジー概念の紹介を通して、「教師中心、教師依存」の学習スタイルから、学習者が自主的に学習を進める新しい学習スタイルへの変換を目指す必要があると述べた。講演後、講師の指示の下、受講者がこれまでの言語学習経験を通して、どんな学習ストラテジーや学習信念を持っているかを振り返る作業を行った。学生の自主学習における不足部分や弱点を如何に発見し、どう補強していくかを戦略的に考えるための分析を経て、学習者に適切かつ効果的なアドバイスができることを、それぞれが感じたことであろう。

特別講演会

5 月 16 日（日）、陳岩氏（大連外国語学院中日比較語言文化研究所所長／政治大学客員教授）を講師に迎え、交流協会日本語センターにて 2004 年度第 1 回日本語教育特別講演会が行われた。テーマは「『対比』・『神似』・『漢（和）化』一日中・中日翻訳の三原則について一」。



講演では、「対比原則」として語順、連想される意義、比喩の習慣、漢字語、表現方式の相違点を考慮することの重要性が述べられた。また「神似原則」として、表層部分として現れているものと深層部分が表している事象の関係を理解しておくことが、更に中国式日本語、日本語式中国語を克服するための方法として「漢（和）化原則」が、具体例を挙げながら解説された。最後に、言語は芸術性のあるものであり、「翻訳」とは芸術を翻訳すること、そして、一つの言語の文化を越え両言語の文化に跨る言語内部の様々な因子を考慮すべきであると結論づけられた。

輔仁大学第五回中世学術研討会

3月26日(金)、27日(土)、輔仁大学において第5回中世学術シンポジウムが行われた。「日欧中世文学における無常観」をテーマに日本文学、中国文学、西洋文学の研究者による発表が行われ、日本からは、森朝男氏(フェリス女学院大学)が和歌の表現から考える日本人の宗教観・自然観について、吉田とよこ氏(上智大学)が明の雑劇と日本の能の比較から日本と中国における無常観の違いについて、佐倉由泰氏(東北大学)が作品における無常観の機能について、それぞれ発表を行った。2日目には「文学における無常観の私見」をテーマに座談会が行われた。今回のシンポジウムでは同時通訳が用意され、日本語・中国語以外の発表やコメントを聞くことができ、日本や台湾以外での文学研究の様子を知ることができた。

台湾南部日本語教師会定例会

3月27日(土)、高雄高級中学活動中心を会場に台湾南部日本語教師定例会が行われた。「日本語ディベート教育—その指導と実際の大会運営報告—」と題した今回の定例会は、まず、小高裕次氏(文藻外語学院)より、昨年10月行われた文藻外語学院主催のディベート大会の運営及び経過についての報告があった。次に、関口要氏(南台科技大学)から、ディベートを日本語教育に取り入れることの意義、及びその指導の実際についての発表があった。反省点や今後の取り組みを含んだ実践的な報告は、様々な資料や情報の紹介と合わせ、日本語教育にディベートの導入を検討している教師にとって大いに参考になるものであった。

2004年度全国大専校院

日本語スピーチコンテスト

台湾日本研究学会 2004年全国大専校院日本語スピーチコンテストが3月27日(土)、台湾師範大学にて開催された。第1次選考を経て選ばれた20名(内3名は欠場)が、2分半から3分間、与えられたテーマで即席スピーチを行い、そして内容に関する質問に答える形で競い合った。審査員長からは今後努力すべき点として、スピーチの構成を考える、会場の雰囲気を取り込むようなエピソードやパフォーマンスを利用するなど、いかにして聴衆を引きつけられるか更なる努力をするようにとのアドバイスがあった。なお、上位結果は以下の通り。

第1位：蕭煜璉(政治大学)「台湾の選挙文化」

第2位：詹欣穎(静宜大学)「一生を変える」

第3位：謝宛蓉(台湾大学)

「鳥インフルエンザとSARS(新型肺炎)」

第4位：蔡佳菱(東呉大学)「台湾食文化」

第5位：徐智慧(文化大学)「国際テロ」

台北市高等学校第二外国語(日本語)成果発表会



4月10日(土)、台北市の景美女子高校で台北市の高校生による日本語成果発表会が開催された。多くの普通高校の生徒は、教育部の「第二外国語教育推進5か年計画」に基づき、日本語、フランス語、ドイツ語、スペイン語から希望する外国語を選択し、履修できる。その中でも日本語は約7割以上の生徒が選択する人気外国語。

「飛鳥祭」と題して開かれた今回の成果発表会には、台北市内の28の高校が参加し、日頃の日本語学習の成果を競い合った。「静」と「動」に分けられた会場では、「動」のプログラム「青春物語」で、各校代表の日本語による歌や演劇などの舞台ショーが活発に繰り広げられる中、「静」では、「タイムトンネル」と称する日本の歴史紹介、「日本の旅」では、日本の各都道府県の紹介がなされた。また浴衣姿の女子生徒による各校ご自慢の出店や「和の世界」をテーマに、歌舞伎、茶道の実演も披露された。なお当日、他の第二外国語の成果発表会も市内の萬芳高校で開かれた。

日本語ディベート交流会

4月24日(土)、淡江大学応用日語系主催ディベート交流会が、南台科技大学、文藻外語学院を招き、三校総当たりで行われた。論題は「台湾はサマータイム制を実施すべきである。是か否か」。事前にテーマを与えられた各校は、各国の実施状況、エネルギー消費量、環境や交通への影響、時差、緯度や日照時間、歴史的な経緯等の調査をもとに入念な準備を行い、意表をつく論理の展開等で審査員や観衆を驚かせる場面もあった。調査に際しての読み書き能力、論理的な構成力、発話および聴解の即応能力等、外国語学習における総合力を試されるデ



ィベートは、学生にとっても指導する教師にとっても難しいものと考えられるが、今回の観衆は、学生たちが十分にその能力を持ち合わせていることを認識できたことであろう。

一方で、質疑におけるやりとり等、日本語によるパブリック・スピーチとしてふさわしいものであるか等の課題も指摘され、外国語としての日本語ディベートのあり方を考える機会ともなった。交流会の結果、一位は淡江大学応用日語系、最優秀ディベーター賞は郭姿珍さん(淡江大)が選ばれた。

また、今回の交流会をきっかけに、ディベートが各学校で学習内容に採用され参加希望校が増加すれば、さらに台湾全体での交流会へと発展が期待できるであろう。

台湾日語教育学会講演会

5月1日(土)、政治大学公企中心で、台湾日語教育学会が主催する講演会が開かれた。前半の講演者は、陳岩氏(大連外国語学院教授)で、話のテーマは「異文化コミュニケーションから見る日本語の社会、文化規則」。講演では、「言語運用能力」とは人とうまくコミュニケーションを行っていくための状況にあった適切な言葉遣いをする能力であり、それは言語能力に非言語要素、すなわち社会規則・文化規則などを加えた総合的な能力であることが、多くの例を挙げて説明された。

続く講演会の後半部分は、黄自進氏(中央研究院)による「台湾における日本研究現状と未来」と題する話。黄氏は、まず台湾における日本研究の重要性を力説、しかしそれとは裏腹に、現況は日本研究に携わる人材の不足、日本語学科出身者の語学、文学、教育偏重傾向で、社会科学分野の日本研究が十分に行われていない状況も説明された。当日会場に集った多くの大学院生は、自分たちの進路と密接な関係のある話に大きな刺激と激励を受け、講演後も講演者に近づき、熱心に質問を投げかけていた。

「琉球風車」が東海大学で「エイサー」

5月14日(金)、沖縄国際大学を中心とする「琉球風車」が、東海大学で「エイサー」を披露した。エイサーとは沖縄各地でお盆の先祖供養のために踊り継がれてきた民俗芸能。大小の太鼓や三線(サンシン)を奏でながら、迫力と緻密なチームワークで観客を圧倒した。昼の部は炎天下の中、キャンパス内を練り歩き(ミチジュネー)、夜は講堂で伝統舞踊や空手、古武道を披露。その後屋外に繰り出したエイサーは、最後には観客も参加しての踊り(カチャシー)となった。東海大学の日文週に姉妹校として参加した「琉球風車」であったが、沖縄の魅力とパワーを存分に発揮し、見るものを圧倒した。

※()内は琉球語



高雄事務所 日本語教育実践講座

5月22日(土)、第3回日本語教育実践講座が文藻外語学院を会場に、志村陽子氏(財)言語訓練測驗中心)を講師に招き行われた。「学生による授業評価の必要性」と題するこの講座は「ほとんどの教師が自分の授業に満足しておらず、改善の必要性を認識している」という調査結果に基づき、授業評価の項目を考えるワークショップから始まった。また、教室での教師の第一声、話し方、板書、教師の動き、学生の動かし方、練習の方法など、教師の心構えや授業中の工夫について、講師自身の経験や他の外国語教育の例を交えた実践的な提案がなされた。さらに授業改善のための教師相互の授業参観やビデオ撮影等の方法とその注意点等が述べられた。参加教師各人にとって、自身の授業への反省と、よりよい授業を考える機会となった。



2004 年日本留学フェア

日本語学校・専門学校・大学・大学院説明会

(高雄) 7月16日(金) 12:30~20:00

会場: 高雄工商展覧中心

(高雄市塩埕区中正四路274号)

(台北) 7月18日(日) 10:30~18:00

会場: 台北世界貿易中心

(台北市信義路五段5号(展覧大樓2F H区))

日本留学試験・日本語能力試験

会場: 財団法人語言訓練測驗中心

問合わせ: 財団法人語言訓練測驗中心測驗二組

(TEL: 02-2365-5050)

(<http://www.lttc.ntu.edu.tw>) 参照。

① 日本留学試験

申込期間: 2004年7月5日(月)~7月30日(金)

試験日: 2004年11月14日(日)

② 日本語能力試験

申込期間: 2004年9月1日(水)~9月10日(金)

試験日: 2004年12月5日(日)

台湾応用日本語学会第三回全国学術大会

6月26日(土)、台湾応用日本語学会例会が高雄大学(高雄市楠梓区高雄大学路700号)で行われる。

問合わせ: 応用日本語学会事務局

(高雄大学健康與休閒學系 TEL07-591-9250)

台湾日本語文学会例会・講演会

台北市YMCA 城中會所にて以下の日程、発表者により例会が行われる。

7月例会: 7月17日(土) 高惠玲(慈濟大学)
濱屋方子(義守大学講師)

8月例会: 8月21日(土) 陳艷紅(警察大学副教授)

9月例会: 9月19日(土) 斎藤正志(文化大学)
徐雪蓉(輔仁大学講師)

(<http://www.scu.edu.tw/japanese/TJA-index.htm>) 参照。

情報をお寄せください

台湾の日本語教育に関する情報を募集しております。また、本誌『いろは』に対するご意見やご要望もお待ちしております。詳細は日本語センターまでお問い合わせください。

TEL: 02-2713-8000 (代表)

FAX: 02-2713-0705

E-mail: nihongo@mail.japan-taipei.org.tw

日本語センターからのお知らせ

2004 年度 日本語教育夏期研修会

テーマ: コミュニケーションのための日本語教育文法
— 聞く活動・話す活動から文法へ —

講師: 山内博之(実践女子大学文学部国文学科助教授)

金庭久美子(実践女子大学文学部非常勤講師)

日程: 台北) 7月25日・26日(日本語センター)

台中) 7月27日・28日(台中技術学院)

高雄) 7月29日・30日(文藻外語学院)

締め切り: 2004年7月9日(金) まで

2004 年度 第3回 特別講演会

テーマ: 年少者のための文化を取り入れた日本語教育の実際

— コースデザイン・教材作成を考える —

講師: 宅間颯子

(St. Michaels University School 講師)

日程: 2004年7月17日(土) 14:00~17:00

締め切り: 2004年7月9日(金) まで

閲覧室開館時間の延長

2004年5月より台北事務所閲覧室の開館時間を以下のように延長しましたのでお知らせします。

(午前) 9:15~12:30

(午後) 14:00~17:30

※ 月曜日~金曜日(交流協会の公休日を除く)

交流協会台北事務所のホームページ移転

以下のアドレスに移転しました。

<http://www.koryu.or.jp/taipei>

お詫びと訂正

3月20日発行『いろは』第14期に以下の誤りがありましたので訂正いたします。

p.8 衍宏→頼衍宏

読者の皆様並びに関係者の方々にご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。

『いろは』6月20日号 目次

1~4 台湾日本語教育情報源

5 日本語センターの活動報告

6 7 日本語教育ニュース

8 台湾日本語教育関連情報

日本語センター研修会のお知らせ